氏　　名	宇垣　匡雅
学位（専攻分野）	博士（文学）
学 位 記 番 号	総研大乙第 186 号
学位授与の日付	平成２０年９月３０日
学位授与の要件	学位規則第６条第２項該当
学 位 論 文 題 目	吉備における古墳時代の政治構造
論 文 審 査 委 員	主　査　教授　広瀬　和雄
	准教授　藤尾　慎一郎
	准教授　仁藤　敦史
	教授　池上　悟(立正大学)
	准教授　佐々木　憲一(明治大学)

論文内容の要旨

吉備地域の首長間関係、また、首長と共同体成員の関係が古墳時代を通じていかなる変化をとげたかを、古墳の考古学的な分析によって検討した。

吉備は古墳時代の政治的中心である畿内の西側に位置しているため畿内からの影響を断続的に受けるが、一方で弥生時代後期に形成された墳墓祭祀の伝統が強固に残る。伝統的な属性の維持と新たな様式の波及という二つの要素のため、古墳は複雑な様相を呈することが多いが、諸要素の整理・検討によって、上記の課題とともに中央(大和)と地方(吉備)の関係の解明、さらには古墳とは何か、古墳という墳墓に与えられた政治的機能はいかなるものかという命題に迫ることができる。

古墳時代前期前半には、全長 138mの浦間茶臼山古墳を筆頭に備前南部を中心に前方後円墳・前方後方墳が多数築かれる。これらには全長４～７ｍの長大な竪穴式石槨が埋葬施設として採用されるが、これを先行する弥生墳丘墓の竪穴式石槨と比較した場合、規模の差以外に構築の手順や構造自体が異なること、さらに構築に用いられる石材も大きく異なることが明らかになった。弥生墳丘墓では墳墓付近で産出する塊状の石材が用いられるのに対し、古墳時代前期前半には吉備の中枢からはるか離れた瀬戸内海島嶼部で産出する古銅輝石安山岩が用いられる。この石材は火山岩であるため扁平な板状を呈し、構築の石材としてきわめて適したものであるが、その搬入には多大な労力を要したとみられる。この石材は最大墳である浦間茶臼山古墳だけでなく墳丘規模が小さな下位の首長墳においても用いられており、個別に石材の搬入がなされたとは考えがたく、首長間の紐帯を表示する資材として大首長によって入手され配布された可能性が強い。

首長間の階層関係は墳丘の規模、そして大形墳が前方後円墳、中規模以下が前方後方墳という墳形の相違によって表示される。一方で、古銅輝石安山岩以外に特殊器台形埴輪の使用や埋葬頭位など首長墳の間に共通する要素をもち、首長間の関係は比較的等質的なものであったとみられる。

前期後半から中期前半にかけては首長墳の築造数は急激に減少する。また、特殊器台形埴輪にかわって埴輪が用いられるが、埴輪は基本的に上位の首長墳に限って用いられるようになる。こうした状況から、首長間の等質的・並列的な関係はくずれ、首長の序列化が進行したとみられる。また、この時期の鶴山丸山古墳、金蔵山古墳は畿内政権から与えられたとみられる副葬品を保有するが、埴輪にも畿内からの影響を認めることができ、大首長墳の築造にあたっては畿内政権の関与があったと考えることができる。

続く中期中葉に墳丘長では全国第４位の大きさをもつ造山古墳の築造がなされるが、この時期が吉備の古墳要素の大きな転換となる。それまで吉備の古墳は山頂や丘陵上に築かれ、また、集落域の外縁が築造の位置に選択されていたが、造山古墳の築造に前後して交通路の至近の位置に築かれるようになる。また、他の地域においては中期の前半には周濠が古墳の構成要素となるが、吉備は周濠の受容が最も遅れる地域の一つであり、造山古墳の段階ないしややそれに先行して周濠が導入される。

さらに、造山古墳では古墳の周辺に埴輪棺を埋葬施設とする小墳や少量の埴輪を伴う小墳が設けられる。これらは造山古墳の築造および埴輪生産にたずさわった集団の墳墓とみられるが、とりわけ埴輪を伴う小墳の出現は、造墓作業の中枢となる集団を大首長が直接に掌握・編成し、一方で埴輪の使用を許容するという方式が畿内から導入されたとみることができる。このように、造山古墳は卓越した墳丘規模を有するというだけでなく、立地や造墓の組織などさまざまな点においてそれまでとは異なる畿内的な様相を見出すことができる。

造山古墳の後、作山古墳を経て両宮山古墳が築かれる。両宮山古墳には内濠・中堤・外濠が伴い、また、造山古墳においては陪塚は前方部前面に密集するという特異な配置であったのに対し、畿内の古墳と同様の後円部に近接するという配置を示している。墳丘や外濠の規模は畿内政権を支えた有力氏族によって築かれた古墳と同等であり、吉備の古墳の「畿内化」の到達点と評価することができる。

両宮山古墳の築造をもって巨大古墳の築造は停止し、かわって吉備の各地域ごとに中形の首長墳が築造されていくが、そうした首長墓系譜のなかにはしばしば帆立貝形古墳が含まれる。帆立貝形古墳は前方後円墳の築造からさほどの時期差をもたず、多くの場合それに続いて築造され、あるいは新たに始まる系譜において採用されるといった特徴があり、首長の傍系親族や新興の首長層に、前方後円墳に次ぐ格式として築造が許容されたと考える。また、これと同じ中期後葉には埴輪を伴う小墳が活発に築造され、かつて首長墳の上位にのみ用いられていた埴輪が辺 10m程度の小墳に用いられることになる。この帆立貝形古墳の普及と埴輪をもつ小墳の拡散は、首長層と共同体成員という築造主体の差はあるが、古墳築造の許容という点において共通しており、畿内政権による直接的な地方支配の手法と考える。

後期の首長墳は全長 12m前後の石室規模をもつ。さらに有力な首長墳は全長 13mから19mまでの規模で、８基が築かれる。12m級の石室をもつ首長墳は後の律令制の各郡に１、２基の分布を示し、それ以上の規模の石室をもつ古墳は後に備中の国府が置かれる窪屋郡と、同じく備前の上道郡に集中しており、奈良時代の地方支配はこれら首長の後裔によって担われるとみられる。

以上のように、吉備の首長層の政治的関係が、畿内との政治的関係によって変化をとげていく状況を古墳から読み取ることが可能であり、立地を含めた諸要素が大きく変化する中期中葉が最大の変革期であったと考えた。また、首長と共同体成員の関係を前方後円墳と小墳の諸要素の共通性と格差の変遷から把握することができた。

論文の審査結果の要旨

古墳時代を通じて吉備という地域は、古墳時代の政治的中心であった畿内地域の政治的対抗馬として注目されてきた。ところが、「吉備政権」や「古代吉備王国」のような華々しいイメージが先行しがちで、古墳時代の実態についての研究はさほど深化されたわけではなかった。本論はそうした観点から、吉備地域に展開する古墳の編年をはじめ、古墳諸要素の緻密な分析を通じて、古墳時代政治動向を読み解こうとするものである。

まず、古墳時代前期前半には、この時期最大級の浦間茶臼山古墳（墳長１４０ｍ）から、墳丘規模が小さな下位の首長墳にいたるまで、埋葬施設の竪穴式石槨には吉備から遠く離れた瀬戸内海島嶼部産の古銅輝石安山岩が用いられる。遠距離におよぶ石材の搬入には多大な労力が必要になるから、それが個々の小首長でなされたとは考えがたく、首長同士の政治的紐帯を表わす資材として、大首長によって入手され配布された可能性が強いとみなす。さらに、この時期の首長墳は大形墳が前方後円墳、中規模以下が前方後方墳という墳形や墳丘規模の相違によって表示される一方、古銅輝石安山岩の使用以外にも特殊器台形埴輪の樹立や埋葬頭位などの共通要素をもっていて、首長層のありかたは比較的等質的であったと考える。

ついで、前期後半から中期前半にかけて首長墳の築造数は急激に減少し、特殊器台形埴輪に代わった円筒埴輪の使用は上位の首長墳に限定される。すなわち、前段階の首長間の等質的・並列的な関係がくずれ、首長同士の淘汰・序列化が進行したと言う。しかも、おなじ時期の鶴山丸山古墳や金蔵山古墳には、畿内政権から与えられた副葬品が保有され、かつ埴輪にも畿内からの強い影響を認めることができることから、大首長墳の築造にあたっては畿内政権のつよい関与があったと見ている。

墳丘の長さでは全国第４位の造山古墳が築造される古墳時代中期中葉が、吉備の大きな転換と言う。造山古墳は交通路の要衝に築かれ、その周囲にはその造営にたずさわった集団の小墳が多数築造される。それまでとは異なって、在地の大首長が造墓集団を直接に掌握・編成するという、畿内から導入された方式を採用していたとみなす。その後、作山古墳を経て両宮山古墳という巨大前方後円墳が築かれるが、それには内濠・中堤・外濠が伴い、陪塚の配置も畿内の巨大古墳と同様のありかたを示す。そして、墳丘や外濠の規模は畿内政権を支えた有力氏族のものと同等である。ここにいたって、吉備の「畿内化」が一つの到達点に達したと評価している。

両宮山古墳以降は、吉備を構成した小地域ごとに中・小形の首長墳が築造される。それらのなかにはしばしば帆立貝形古墳が含まれるが、前方後円墳の随伴的位置にあったり、新たに始まる系譜において採用されたり、といった特徴から、前方後円墳に次ぐ格式として、首長の傍系や新興の首長層に築造が許容されたと考えている。また、同じく中期末葉には埴輪を伴う小墳が活発に築造されるが、これらは首長層と共同体成員にたいして、畿内政権がとった直接的な地方支配の手法だと言う。

後期になると、有力な首長墳は全長１２ｍ級の横穴式石室を築造し、次の律令期の各郡に１、２基ほど分布している。さらに、全長１３ｍから１９ｍまでの巨大な横穴式石室は８基築造されるが、それらは備中国府が設置された窪屋郡と、備前の上道郡に集中していて、奈良時代の地方支配はこれら首長の後裔によって担われたと見る。

以上のように、吉備の首長層や共同体成員の古墳の特性を、膨大な考古資料の整理・検討を通して丹念に追求することで、古墳という墓制は重層した首長間の政治的関係を表示していたと結論づけ、上述したような吉備の政治的位置を考える。そして、畿内勢力が西方に進出しようとするときの交通路に吉備は位置しているため、新たな様式の波及を断続

的にそこから受けつづけるが、一方で弥生時代後期に形づくられた墳墓祭祀の伝統も強固に残っていて、それら二つの要素によって古墳は複雑な様相を呈すると指摘する。

このように、畿内との関係によって変化をとげていく政治動向を古墳から読みとりながら、けっして吉備の地域史にはとどまらず、古墳時代の政治動向に肉迫している。ただ古墳時代といいながら前期と中期が中心になっていて、後期についての論究が少ないし、『記紀』などを史料とした文献史学をはじめとした先行学説にたいする評価がやや弱いし、吉備の一員たる美作への言及も乏しい。しかしながら、たえず畿内地域を視野に入れながら、これまで不分明なところが多かった吉備の古墳時代を明らかにした本論の学術的価値は非常に高い。したがって、本論文は学位の授与に相当すると判断される。